



おじさんズ通信

2021年5月号 (No.6)

発行元：登別市新生町4丁目桃柿通

緑風舎

発行者：おじさんズ3号

「丈草の記」に学ぶ

「丈なす野草をふみわけて、精魂のかぎりを傾けて、ようやくにたどりつきたる峰のいただき、陽将(まさ)に暮なんとして、路もはるかなる越し方をおもう」

この一文は明治15年4月、香川県那珂郡今津村から両親、兄弟姉妹とともに、はるばる北海道幌別村に移住した宮武藤之助が、昭和24年にまとめた「丈草の記」の書き出しだ。昨年秋、制作をお手伝いした登別市立図書館のホームページに、特別に設けさせてもらった「市民活動サポーターおすすめ郷土資料」コーナーの第4弾として5月1日に掲載した次第。

15歳で故郷を離れ、開拓に、醸造事業に、地域の発展に奮闘した67年に及び人生の記録だが、明治期の地域の開拓史を知る上で、貴重な史資料であり、「入植した当時の東来馬は、千古斧を入れぬうっ蒼とした樹木で蔽われ…」と、登別町史、市史にも度々、引用されている。

読んでみると、いろいろ勉強になるが、編集ソフトに打ち込んでいて、心に残った一節が二つあった。

誰にも束縛されない自由の地

宮武一家6人が4月5日、今津村に別れを告げ、幌別村にたどり着いたのは5月8日だから、入植までに1カ月以上を費やした。その理由は多くの家財・荷物を持っての移動。室蘭までの船便が出る函館では、日和待ちで宿代や食事代で金は出ていく一方。幌別へ行くよりも、函館付近の未墾地の貸し下げを受けろ、というアドバイスを振り切り、二束三文で家財道具を売り払い、室蘭への船便が出ている森までの歩き旅に、彼等が踏み出したのはなぜか。

「これらの好条件を排除してまでの理由。これはただ一つ。誰にも束縛されない自由な移住、そして自由な地を自分達の力で求めようではないか、という事であった」

今津村では村役人で経済的にも高い地位にあった宮武家だったが、それは本家筋の話、分家の父清兵衛一家にとっては、「分家は収まるべくして収まる」という古い「しきたり」から脱皮しようと、一家挙げて北海道での開拓に望みを託した。同郷の先駆者が幌別に居たというのも、この地に賭けた理由の一つだった。

見孫のために美田を買う

「見孫のために美田を買わず」

西郷隆盛の詩に出てくる言葉だが、藤之助は「丈草の記」のむすびで、逆に「自分は見孫のために取って美田を買いたし、と念願してきた」と語っている。

それは子や孫に楽な暮らしをさせたり、徒食飽食させたりするためではなく、世の中への貢献や奉仕は財力の裏付けなくしては叶わない、と信じるからだという。

一族筋には明治・大正期、政治家や官僚、行政、マスコミを含め、その腐敗を言論で追及した有名なジャーナリスト・宮武外骨がいるという。本家伝来の醸造業技術を懐に、北の地で一家再興の道を歩んだ藤之助の気骨と、相通ずるものがあつたといえる。

登別市立図書館 HP で、ご一読あれ。



開拓、また開拓、ひたすら開拓

故郷史探索記

熱海 勝を追って(1.5)

一筆啓上。

その後の熱海探索は、なかなか進みませぬ。コンタクトをとったひ孫さんは、それこそ系譜でいうと分家筋。勝の長男筋に連絡を取り、情報を収集したいとのことで、吉報待ち。

しかし、こちらの血筋もたいしたもの、勝のおじに当たる(多分)人物に熱海貞爾という人物がいる。この人は西洋の河川工学書を日本で初めて翻訳した人で福沢諭吉とも親交があつたようだ。

で、こちらでの調査は、明治期の「幌別村治類典」に熱海勝の名前が出てこないか、地道に探索するのみ。というわけで、追跡記のナンバーは(1.5)になりました。お許しを〜。



今年も種から育てた岡山産白桃に花が咲き……（桃柿通緑風舎庭園にて）、

地球は いま 幸せだろうか

桃の花が 五月の空にぎゅぎゅきかける

地球は いま 幸せといえるの

五月の風が、枝を揺らして問い掛ける

作為に満ちた人々の世界をよそに

自然は こんほまでこ

時の流れに溶け込み 幸せを享受している

(3号)

薫風 烈風

食卓日記

チャイブ、ご存じですか

「これ、ニラ？ それともネギ？」

「浅葱（あさつき）の一種よ」

庭の片隅にいつの間にか、なり始めたのは「セイヨウアサツキ」「エゾネギ」とも呼ばれるヒガンバナ科ネギ属の根菜チャイブ。カロチンを豊富に含んでおり、ネギと同じ芳香を持っているので糖質をエネルギーに変えやすくする作用があり、食欲増進効果があるという。

風が種を運んできたのか？ いや、山の神いわく、10年ほど前に買ってきた酒のおまけに付いてきたという。「へえ～知らなんだ。10年目の幸、ここにあり」である。



野菜屋さんで買うと、そこそこのお値段とか。ハサミ片手に、ささやかながら朝の収穫にいそしみ、食卓の小鉢から、あの独特な香りを漂わせる。

作家の小椋山博氏が登別での講演で、こう申していました。

「朝、御飯をおいしくいただける。これほどの幸せがありませんか」

今年は、ミニトマト栽培に挑戦だ。凡人はつい、欲を出してしまうのであります。

▶「インターネット接続に使っているモデム、新しいものに無料で交換、回線速度はもっと早くなります」と、身分証明プレートを首から下げた、関西なまりのお兄ちゃんがピンポンして、玄関先に現れた。最初に「NTT」をにおわすのは、電話での勧誘と同じ。よく聞くと、NTT コラボなる提携先の企業で、最後は契約先をNTT から自社に切り替えるのが狙いだ。それにしても、電話じゃ効果なしと、わざわざ各戸撃破作戦とは。もちろん、体よくお断りしたが。

▶かかりつけ医院の診察が終わりかけに「これ、差し上げます」と見せられたのが、

「〇〇様 新型コロナワクチン接種に関して、当院で診察している疾患については接種可能です。

〇年〇月〇日 説明医師 〇〇」

と書かれた紙片。いずれ行うワクチン接種は、この医院ではできないので、集団接種の際、提出せよとのこと。何と親切なことか。同時に、頭に浮かんだのは予約電話のパンクや、ネット予約のサーバーダウン、そして、お金持ちへの忖度予約。そんなに急いで、どうするの？狂騒曲は続く。

▶いまだに年に1、2度うなされるのは「やばい。きょう出す記事が1本もない！」と、かつての職場時代にあったのか、なかったのかハッキリは思い出せない悪夢。「ただ飯食いの、このヤロウ！」の罵声デスク席から飛んできてうろたえる、我が姿を上から眺めて目が覚めた。この脅迫観念はどこから来るのか。夢の根源は内臓系からといわれているが、元をたせば貧乏根性の深層心理のなせるワザか。こうなりゃ、これを逆手にとって、小説にでもするか。では、皆さん、お元気で～。